九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

百閒漫歩 ： 逢魔が時の文学

森，茂太郎
九州大学大学院言語文化研究院

https://doi.org/10.15017/16852

出版情報：Stella. 28, pp.39-52, 2009-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

百 閒 漫 歩

――逢魔が時の文学――

森　　茂 太 郎

「記念帖」

日本の敗色がようやく濃厚になりつつあった昭和19年春，東京麹町五番町の寓居にあって，乏しい配給の食糧で露命をつなぎながら酒と煙草の調達に明け暮れていた55歳の内田百閒は，ある日，ふとしたことから住所録の整理を思い立った。それまでは「著書寄贈先の覺帖に所書を記入したのを名宛帖に使つてゐたが」，すでに9年を閲して「書き入れが亂雑になりその内整理しようと思ひながら中中果さなかつた」のを，一念発起，宿願を果すべく決心したのである。だが，何しろ「億劫帳」の百閒先生のこと，なかなか神輿があがらず，ようやく住所録の整理が終った頃には，とうに春は過ぎ，夏も盛りの季節になっていた――「隨分手間のかかる面倒臭い仕事であつたが漸く出來上がつてせいせいした」。

ところが，それから三月と経たぬ11月1日，東京に初めて「本モノノ空襲警報」が発令された。これを皮切りに，連日連夜空襲警報のサイレンが鳴りわたり，24日には最初の大規模な空襲が東京を見舞った。年が改まると空襲はさらに激化し，初めは下町が焼かれていたのが次第に山の手方面におよび，ついに3月10日，「本所深川淺草カラ九段ヘ掛ケテノ大空襲所謂絨氈爆撃」となる。「その内に東京と云ふものは丸で無くなり」，やっとのことで新調した住所録であったが，こと東京に関する限り，せっかくの先生の苦労も「無駄骨折り」に終った。

一面の焼野原となった東京に続いて，「今度は地方の都會が片つ端から無くなり始め」る。漱石山房の先輩小宮豊隆のいた仙台は焼けた。檢校宮城道雄の疎開した宇都宮も焼けた。百閒の郷里岡山もB29の焼夷弾攻撃による大火で全市ことごとく灰燼に帰した――「私の知人の所書覺はさうなる前までの記念帖と

云ふより外に何の役にも立たなくなつた様である」[1)]。

*

ところで百閒は，この住所録の外にもうひとつ，戦時中の「記念帖」ともいうべきものを残していた。戦時下の耐乏生活を一日一日克明に記録した日記帳がそれで，このうち「本モノノ空襲警報ガ初メテ鳴ツタ」11 月 1 日から敗戦直後の 8 月 21 日までの日録が，戦後 10 年を経て『東京焼盡』として刊行された。

『東京焼盡』は冒頭に「序ニ代ヘル心覺」と題する文章があり，そこで百閒は身の危険も省みずあえて東京に踏みとどまった理由について，次のように記している――

> ○ナゼ疎開シナカツタト云フニ行ク所モ無カツタシ又逃ゲ出スト云フ氣持ガイヤダツタカラ動カナカツタ
> ○何ヲスルカ見テヰテ見届ケテヤラウト云フ氣モアツタ[2)]

滅び行く東京の姿を最後まで「見届ケテヤラウ」とした作家は，もちろん百閒の外にもいた。たとえば坂口安吾は，「最も死を怖れる小心者」でありながら，東京の崩れ行くさまを見物したいという「大いなる誘惑」にかられて，あえて瓦礫の都に踏みとどまった[3)]。それなら，百閒もまた同じ「誘惑」にかられるがままに戦火の東京に居座りつづけたのだろうか。そうかも知れない。そんな百閒の期待が少しも裏切られなかったことは，『東京焼盡』の次のような記述を見ればたちどころに分かる――

> こはいけれども退儀だから逃げずにかうしてぢつとしてゐると向うからやって來て，居ながらに戰雲漠漠たる滅多に見られるものではない大変な光景を，しかもこの頃はしよつちゆう見せてくれると考へた。[4)]

ただ百閒の場合，「見る」とは，単に好奇心にかられて見ることではなかった。少くともそれだけではなかった。なぜなら，百閒にとって「見る」とは，まず何よりも「表現」すること，名づけようのない「もの」を分節化し，認識し，記述することを意味していたからである――

人間に取つて一番大事な物は言葉である。言葉は文字に移す事が出來る。言葉を聲でなく現はさうとするのが，文字に依る文章であつて，文章と云ふ物は人間の凡ゆる營みの中で一番尊いものである。御飯を食べるとか，眠るとかは，人間で無くても出來る事で，言葉と云ふ點だけが人間は他の動物と違つてゐる。言葉が同時に人間に思索や創造を與へるのであつて，我我が夢を見るのさへ言葉がなければ見られない。夢を見たと云ふ事を思ふ事は出來ない。思ふとか考へるとかは言葉がなければ出來ない。言葉が無ければ凡ゆる空想も，想像も，妄想すらも出來ない。その言葉を文字に移し，文字を綴つて文章を成す。そこで文章と云ふ物は人間の一番大事な寶であるに違ひない。[5)]

まるで「世界は一冊の書物に到達するためにある」と言わんばかりの口ぶりではないか。これは『百鬼園夜話』冒頭に置かれた「口上」の一節だが，百閒は同様の見解を昭和 16 年 7 月，慶應義塾の学生を相手にした講演でも述べている。

百閒曰く，言葉は「我我人間の一番大事な天賦」である。「あらゆる思考感情，もつと簡單な感覺」でさえすでに言葉である。言葉なくして，われわれは感覚も「經驗とする事」ができない。「言語に絶する景色だ」という。しかし「言語に絶する」と感じるためには「言葉の力」を借りなければならない。「無念無想」にしたところで，その言葉のない境地を認識するにはやはり言葉によるしかない。

すべてが言葉である以上,「表現」と「内容」は区別されない。なぜなら「表現は言葉で出來てをり，内容も同じ言葉」だからだ。したがって「内容から遊離した表現と云ふものだけを成立させる事は出來ない」——

結局らつきようの皮を剥く様なものです。らつきようの皮を一枚，皮だと思つて剥く。その次に皮があつて，またそれを剥く。次から次へと剥いて行くと，仕舞まで皮ばかり，どこから皮で，どこからがらつきようの中身だと云ふ事はない。[6)]

百閒にとっては，ただ表現されたものだけが「眞實」であり「現實」なのだ。「美しい景色」を眺めただけでは,「それは我我の認識としては眞實だとは云はれない。それを表現し得て，初めて眞實を人人に認識させる事が出來る」。

構造主義の流行はまだ遠い先のことである。戦前の学生の耳にはいささか奇異に響いたにちがいないこのような一風変わった言語観を，百閒はどのようにして抱懐するにいたったのだろうか。ソシュールの『一般言語学講義』はすで

に小林英夫によって翻訳され，まんざら百閒と縁がなくもない岩波書店から刊行されていたから，百閒がその翻訳なり紹介なりを読んでいたとしても不思議はないし，仮にも帝大出のドイツ語教師だったから，ハイデガーを知っていた可能性も無下に却けることはできない。百閒がフロイトの『夢判断』を読んでいたことは確実だし，いきなりヴォルフか何かの心理学を持ちだして読者を煙に巻いたりもするので油断はできない。しかし百閒言語学の発想の源を探り当てるのに，そんなに遠くまで足を運ぶことはなさそうである。

江藤淳に「リアリズムの源流」という優れた論文がある。日本のリアリズムの成立についてはすでに定説があり，それによれば，坪内逍遙の『小説神髄』，二葉亭四迷の『小説総論』，そしてこの理論を実地に応用すべく書かれた『当世書生気質』と『浮雲』によって，はじめて日本の文学に近代的なリアリズムの基礎が置かれた。江藤は，この論文の中で，このような文学史的常識を大胆にくつがえし，雑誌『ホトトギス』に拠る俳人たちの写生文の運動に日本のリアリズムの「源流」を見ている。

逍遙も二葉亭も，たしかに近代的なリアリズムの理論をもたらした先駆者であったかも知れない。しかし彼らの実作はどうか。逍遙は『当世書生気質』を書いて小説の筆をなげうち，二葉亭も『浮雲』一編を残して小説の筆を断ったではないか。それは結局，彼らが新しい文体の創造に失敗したからだ，と江藤はいう。彼らの目の前には，文明開化とともに出現した「名づけようのない新しい現実」，時代の割れ目から出現した「もの」があった。彼らの使命はまさにこの「もの」に名前をあたえることにあったが，しかし彼らの周囲には，徳川期の遺物である形骸化した「漢文崩し」と「擬古文体」の文章しかなかった。それではとうてい「もの」はとらえられぬ。そこへ写生文という新しい文体があらわれ，人々の眼を新しい現実にひらいた。江藤はいう――「新しい文体とは単に新しい表現の様式というにとどまらない。それは同時に新しい認識の回路である」[7)]。

子規や虚子の写生文にいたって，現実から遊離して文章を空回りさせていた美文の枠が外れる。虚子の写生文では，「文章が直接対象にしなやかに取りつき，今日の意味でいう描写が適確におこなわれている」[8)]。そして漱石の『坊っちゃん』は，まさにこの「虚子の源流」から出現した。清新な言文一致体で書かれたこの小説は，『浮雲』をはるかにしのいで，日本のリアリズム小説に「活」き

た文体をあたえることに成功したのだ，と江藤はいうのである。

子規から虚子へ，虚子から漱石へといたるこの写生文の系譜の中に，百閒先生を位置づけるのは造作もあるまい。中学，六高時代を通じて句作に熱中した百閒は，『ホトトギス』の愛読者であった。この雑誌で『猫』を読み，『坊っちゃん』を読んだ。百閒が文学に開眼したのは漱石のこれらの作品のおかげであり，このときからというもの，漱石の文章は百閒の「表現の標識」でありつづけた。さらに中学時代の百閒が，ほとんど毎月のように『文章世界』に写生文を投稿し，選者の花袋に激賞されていたこともここに付け加えておくべきかも知れない。いずれにせよ，『ホトトギス』から漱石を経て自分へと連なる文学上の系譜に百閒が早くから自覚的であったことは，六高時代の未完の習作，「俳諧派文学研究」で跡づけた「俳諧派文学」の系譜が，江藤のいうリアリズムの系譜とほぼ重り合うことからもうかがわれる[9)]。

おそらく，百閒の血は騒いだのである。百閒の眼前には，空襲という名づけようのない「もの」があった。尊敬する先達の誰ひとりとして未だ写生したことのない「もの」，あの漱石ですら表現したことのない未曾有の「もの」があった。虚子は手帳と鉛筆を携えて浅草へ出かけ，「写生」して帰ったものを文章にしたという。その虚子にならって，百閒もまた日記帳と万年筆を手に，迫り来る巨大な破壊を待ち受ける。このとき百閒の内部に燃えさかっていたものが，虚子と同じ，あの「もの」をとらえようとする熾烈な関心」であったことは疑いない。

*

だから，「何ヲスルカ見テキテ見届ケテヤラウト云フ氣モアツタ」と百閒がいうとき，この言葉は額面通り受け取ってよいのである。しかし「見届ケ」るだけでは十分ではなかった。それは書かれねばならなかった。なぜなら，ただ眺めるだけでは，「それは我我の認識としては眞實だとは云はれない。それを表現し得て，初めて眞實を人人に認識させる事が出來る」。

それにしても，なぜ「認識する」ではなくて「認識させる」なのだろうか。それは，真実は自分以外の何者かによって真実と「認識」されないかぎり，真実とはなり得ないからだ。自分だけの真実，たったひとりの真実などというものはない。なぜなら，ここで百閒のいう「眞實」とは，言葉によって「表現」さ

れた真実であり，言葉を用いて表現しようとする以上，それは必然的に他者の次元を内包することになるからである。ラカンのいうように,「応答を求めないパロールはない」[10)]。言葉は，たとえそれがふともらされた独り言であっても，そこには必ず語りかけられる他者がひそんでいる。

こうして「認識」された真実,「人人」の共有するところとなった真実は，われわれの記憶のなかに書き込まれる。ラカンならば，それを他者，それも大文字の「他者 Autre」と呼ぶだろう。もとより真実は言葉にすぎない。実体をそなえた現実ではなく，言葉の次元に転移された現実，いわば虚体としての現実にすぎない。だが，それは虚体であるからこそ，虚体としての現実にすぎないからこそ，娘を失ったＦ先生の「行くへも知らぬ」悲しみを，何百年も前に「西行法師が歌つ」ていたという不思議も起こり得るのではないだろうか[11)]。

書くこと，表現すること――だからそれは，流れ行く不可逆的な時間への挑戦でもある。すべてを滅ぼす仮借ない時間の流れを前にして，人はせめて虚体にすぎない言葉を救いだす。こうして救いだされた「眞實」の集積,「現實」の堆積を歴史というなら，歴史とはそのまま壮大な一冊の「記念帖」にほかならない――

> 去年の十一月以來隨分こはい目を見て來た。臆病だから人竝以上に恐れたが，しかし心行くばかり恐れたと云ふ片づいた氣持もある。こはい事をこはい事と思ふまいとしたり何かに氣を取られて或は遠慮して中途半端に恐れるのは恐怖以外の不快感を伴なふ。この節の生活では恐れると云ふ事以外に人生の意義は無いのではないかと云ふ様な事も考へた。[12)]

恐怖は最後の一滴まで味わい尽くされなければならない。「表現」され,「認識」されなければならない。数々の堪えがたい死と離別を，まさに書くことによって乗り越えてきた百閒は、そのことをよく知っていた。さもないと，恐怖は「内生活の滓」となって残り,「恐怖以外の不快感」をともなう症状（symptôme）となって回帰してやまないだろう。百閒の見た戦後の風景は,「赤ん坊を喰つた」ような「眞赤な口をした若い女」やら,「代代木の鴉」を塒から「追つ拂」ったオリンピックやら,「角太ン棒」を振り回す「神州全學連」やら，奇怪でグロテスクな症例に満ちあふれていた。

だからこそ,「もの」は直視されなければならず,『東京燒盡』は書かれなけれ

ばならなかった。たとえ後に残るのが一冊の「記念帖」にすぎないにせよ――。

*

百閒によって「見届ケ」られた東京焼盡の光景は，ときに息をのむほど美しい――

……こはかつたのは，いつもよりはずつと低く三千米から四千米位を飛んでゐる敵機に高射砲が實によく中たり，目撃しただけでも五つか六つかは火燄のかたまりになつて墜落した。その儘火の玉になるのもあり，すぐに空中分解をしていくつかの燄に分かれて落ちるのもあつた。いい氣味でもあり綺麗でもあるが落ちる前に空をぐるぐる廻つてゐる内頭の上からここへ落ちて來やしないかと云ふ心配がある。火達磨になつてもすぐには落ちないで大概上空を半周ぐらゐする間は燄の尾を引きながら飛んでゐる。その火の玉が近づくと眞晝よりも明かるい。燃えながら飛んで東の方から家のうしろの空へ廻つた一機がある。高度が低いのでうしろへ廻つたら見えなくなつたが，その明かりで家の影が往來の地面へ白紙に墨で描いた程はつきりと映つた。赤い火でなく白光りがしてゐる。家のうしろから出て土手の向うへ廻つたと思ふと，下に向かつて二つか三つの大きな楕圓形を描いて最後の圓周の線をしやくられた様に伸ばしたと思つたら，大分南へ寄つた方のさう遠くない所へ落ちて行つた。[13)]

……大概大丈夫と思はれる様になつてから土手の方へ行つて見たが，丁度その時雙葉の一番こちらの外れの一棟が燒けてゐるところにて，その火が土手沿ひの道にかぶさつてゐる何百年かの老松の枝に移り，白い色の燄が水の傳はる様に梢から幹に流れた。雙葉の一郭は大變な火勢にて，すつかり火の廻つた庇だか天井だか解らぬ大きな明かるい物が，燃えながら火の手から離れて空にふはりと浮かび，宙を流れる様に辷つて，往來を越して土手に落ちた。土手も燃えてゐる。土手が燃えるかと更めて感心した。アスフアルトの往來には白光りのする綺麗な火の粉が一面に敷いた様に散らかり，風の工合では吹き寄せられて一所にかたまつたり，又一ぱいに廣がつたりしながら，きらきらと光つてゐる。道もせに散る花びらの風情である。[14)]

雙葉女学校が焼亡した4月13日の空襲では，百閒の家はかろうじて類焼をまぬがれた。しかし5月25日夜，ついにその時がやって来た――

……燒夷彈が身近かに落ち出した。B29の大きな姿が土手の向う，四谷牛込の方からこちらへ今迄嘗つて見た事もない低空で飛んで來る。機體や翼の裏側が下で燃えてゐる町の燄の色をうつし赤く染まつて，ゐもりの腹の様である。もういけないと思ひながら見守つてゐるこちらの眞上にかぶさつて來て頭の上を飛び過ぎる。どかんどかんと云ふ投彈の響が續け様に聞こえる。[15)]

……家の焼けたのを確認したのは夜が明けてからである。その前に一二度行つて見ようとしたが，未だ近づけなかつた。家竝は焼け落ちて燄は低くなつているが，兩側の電信柱が一本殘らずみんな火の柱になつて燃えてゐる。昔の銀座のネオンサインの様で絶景だと思つた。[16)]

なんという正確で緻密な，そしてリアルな描写であろう。私はこれを書き写していて，百閒の文章の見事さにほとほと感じ入った。ひとつひとつのイメージが無気味なほど鮮明で，まるで悪夢のような生々しさだ。しかも阿鼻叫喚の地獄絵を描いて，なんという静けさだろう。炎と煙のなかで大勢の人々が焼け死んでいく凄惨このうえない光景を描きながら，それを見つめる百閒の目はどこまでも乾いている。おそらくこういうところに，瀧井孝作は「居直つた肚のすわった強さ」を見たのだろう。

ところで，『無意味の涙』という出色の百閒論を書いた川村二郎は，上に引いた雙葉女学校が炎上するくだりについて，これを写生文とすると，「最後の一句は気にかかる」[17)] といっている。川村によると，「花びら」は描写ではなく「むしろ凡庸な修辞的な連想」にすぎない。しかし，そういうとき，川村は「写生」ということをあまり窮屈に考えすぎているような気がする。ついでに指摘しておけば，「道もせに散る花びら」は，単に「火の粉」を「花びら」にたとえた「凡庸な」比喩ではなく，八幡太郎義家の「吹く風をなこその関と思へども道もせにちる山ざくらかな」を踏まえた本歌取りである。

たしかに，正岡子規の唱導した写生文の本義は，ありふれた文学的連想を排して目前の事物をあるがままに描こうとしたところにあったかも知れない。しかし「写生」は決して感受性に刻印された印象の単なる羅列ではないし，しかもそれが古来用いられて来た母国語によって行われる以上，文学的連想をまったく排除することもできない。つまり「写生」はすでに「空想」を内包しているのであって，自然の忠実な描写を何よりも重視した子規・碧梧桐に対して，むしろ「源氏以来の歴史的連想すなわち空想趣味」を積極的に活かそうとした虚子ならば，優婉きわまりないこの百閒の本歌取りを拒みはしなかったにちがいない。

そうはいっても，たしかに川村のいう通り，百閒の空襲日記には，「おしなべて陰気な報告の所々に，オヤと思わせる言い廻しや形容が出てきて」[18)]，われわれを面喰らわせることがあるのは否めない。高射砲が「賑やかに」鳴り出した

り，サーチライトの照らし出すB29の姿が「綺麗」なので「面白い様な氣がし出し」たりするのはまだ序の口で，やっと空襲警報が解除になって一息ついたところで，「大分寒くなつたが，雙葉の火に暫らく向かつてゐると暖かくなる」と暢気な感想をもらしているのには，いくら何でもと呆れてしまう。上に引用した一節でも，「土手が燃えるかと更めて感心」したり，電信柱が一列になって燃えているのを見て，「昔の銀座のネオンサインの様で絶景だ」と感嘆したりするのは，特に後者は自分の家が焼け落ちた直後の感想であるだけに，まったくあいた口がふさがらない。

これより先，3月10日の大空襲で，永井荷風は「二十六年住馴れし偏奇館」の炎上するさまを目撃した。「嗚呼余は着のみ着のまゝ家も藏書もなき身とはなれるなり」という荷風散人の怒りと悲しみは百閒にはない。這々の体で従弟の家に転がり込んだ散人は，彼の愛した浅草，吉原，向島，玉の井，すべて灰燼に帰したと聞いて眠りにつく――「灯を消し眼を閉るに火星紛々として暗中に飛び，風聲啾々として鳴りひゞくを聞きしが，やがて此の幻影も次第に消え失せいつか眠におちぬ」[19]。荷風の見た幻影の「火星」は「紛々として暗中に飛」ぶが，百閒の見た「火の粉」は，「道もせに散る花びら」さながら，アスファルトの往来の上を楽しげに舞うのである。

百閒がうろたえていないというのではない。すでに焼け跡になった雙葉の方角を暗いからと敬遠して，火に慕い寄る夏の虫のように，盛んに火の手の上がる市ヶ谷方面に逃げ出そうとするほどあわてふためいている。だが，恐怖で狼狽するそんな自分を醒めた目で眺める，もうひとりの百閒がいるのだ――

> 燒夷彈が身近かに落下する様になつてからは隨分低く降りて來てゐるらしい敵機を見上げて自分の身邊に危險が迫った事は十分解つてゐるのであるが一方ではこれは實に大變な事であると云ふ事を一つの壯大な出來事として觀察してゐると云ふ様なところもあつた。[20]

六高以来の俳友土居蹄花の戦時中の俳句を評した「オセツカイ評釋」という一文で，百閒は「かういふ時局の風物を詠み込んだ句には」えてして「吃りの痙攣した様なのが多い」が，それは「離れる事を知らずにせき込んで，俳句を詠んでゐると云ふ自分の境地を忘れる」からだといっている。「上手下手は二の次ぎであつてまず天地萬象に對する自分の性根を磨く事」が肝要である[21]。ま

た,「漱石俳句の鑑賞」では，いかなる悲傷事や不快な経験をも「十七字の詩形に盛つて，淡淡として，澄ましてその不快なり苦痛なりを客觀せんとするのが俳諧の常道」[22] であるともいっている。

「それをなし得る」のがすなわち「俳徳」であるとすれば,「俳徳」とは何と恐ろしいものなのだろう。なぜならこの「俳徳」は，その極まるところ，小林秀雄が「戦争と平和」で印象深く語ったあの「仏の目」，地獄の劫火も楽土と映る「仏の目」まで行きつかざるを得ないからである[23]。百鬼園先生に「仏」は似合わぬというのであれば,「阿房の目」といいかえてもよい。人間的感情のまったく欠落したうつろな目という点で,「阿房の目」は「仏の目」に一脈相通ずるところがあるからである。この世を超越した，いわば非 - 世界（im-monde）のものである非情な目の前で，生と死，善と悪，幸と不幸といった世俗のあらゆる分節は意味を失い，世界はみるみる荒れはてた廃墟と化して行く。百閒の空襲日記にみなぎる不思議な静謐さがこうした「阿房の目」に由来するものであることは疑いないが，しかしそれは修練を通して獲得された「俳徳」というより，もともと百閒にそのような素質が具わっていたからにちがいあるまい。ラカンをもじっていえば,「誰もが阿房になれるわけではない」のだ。

大きな一面の焼け野原となった東京の町を眺めて，ふと百閒は「陽気の所為で神も氣違ひになる」という漱石の文句を思い出す。「氣違ひ」になった神の所行を記録するのに,「阿房の目」ほどふさわしいものがまたとあろうか。

家を焼け出された翌日，百閒夫婦は近所の掘立小屋で一夜を明かす。朝，目を覚ました先生が最初にしたことは,「一日かかって二三日來たまつてゐた日記」をつけることであった。水も電気もない，台所も便所もない，わずか三畳のあばら屋だが，やがて百閒は「ここを庵として戰雲のをさまる迄安住したい」と考えはじめる。大家の快諾を得て一安心した百閒は，その日の日記にこう書き記す――「燒け出されたけれど雨露を凌ぐいほりが出來たので，これからの明け暮れが樂しみである」[24]。

*

戦後,「阿房列車」の百閒先生は，ときおり汽車で郷里岡山を通過することがあった――

時時汽車で岡山を通る時は，夜半や夜明けでない限り，車室から出てホームに降り改札の所へ行つて驛の外を見る。改札の柵に手を突き，眺め廻して見る景色は，旅の途中のどこか知らない町の様子と變るところはない。どこにも昔の面影は殘つてゐない。……古い記憶はあるが，その記憶を辿つて今の岡山に聯想をつなぐのは困難の様である。何事もなく過ぎても，長い歳月の間に變化は免れない。況んや岡山は昭和二十年六月末の空襲で，当時三萬三千戸あつた市街の周邊に三千戸を殘しただけで，三萬軒は燒けてしまひ，お城の烏城も烏有に歸して，昔のものはなんにもない。しかし岡山で生れて，岡山で育つた私の子供の時からの記憶はそつくり殘つてゐる。空襲の劫火も私の記憶を燒く事は出來なかつた。その私が今の變つた岡山を見れば，或は記憶に矛盾や混亂が起こるかも知れない。私に取つては，今の現實の岡山よりも，記憶に殘る古里の方が大事である。見ない方がいいかも知れない。歸つて行かない方が，見殘した遠い夢の尾を斷ち切らずに濟むだらう……。[25)]

先生にとっては,「今の現實の岡山よりも，記憶に殘る古里の方が大事」なのである。しかし先生の「記憶に残る古里」は，必ずしも戦前の岡山，空襲で焼かれる前の岡山ではなかった。B29 に焼き払われるはるか以前から，岡山の町は様変わりして，すでに「昔の面影」は失われていたからである。

百閒のように古京の町で育った者には，後楽園は「一生忘れる事の出來ない夢の園」であったが，文明開化の波はここまで押し寄せ，いつのまにか「土手の藪」は刈り取られてしまった。昔の「後樂園には陰があり，どんな隅の暗い小みちにも箒目が立つてゐた」。しかし「むげむげとむき出しになり，へんに明かるく白け返つた」後楽園に，「庭の精」はもう住めない。

鶴鳴館も空襲で焼け落ちたが，土手の藪を惜しげもなく刈り倒した「先覺者達」からすれば，その取り壊しはすでに既定の事実だったのかも知れない。B29 の焼夷弾攻撃はその「仕上げ」，最後の「一刷毛」にすぎなかった[26)]。

ところが，それはまだ最後ではなかった。最後の「一刷毛」は思わぬところからやって来た。

*

昭和 21 年 11 月 16 日，「現代かなづかい」と「当用漢字」が内閣訓令・告示をもって制定され，用字用語法の改定が強行された。内閣訓令第 7 号に曰く，「漢字は，その數がはなはだ多く，その用いかたも複雑であるために，教育上ま

た社會生活上，多くの不便があった。これを制限することは，國民の生活能率をあげ，文化水準を高める上に，資するところが少くない」。また第８号に曰く，「從來のかなづかいは，はなはだ複雑であって，使用上の困難が大きい。これを現代語音にもとづいて整理することは，教育の負擔を輕くするばかりでなく，國民の生活能率をあげ，文化水準を高める上に，資するところが大きい」。

善意の押し売り，愚民政策とはこのことだ。百鬼園先生はめずらしく怒りをあらわにする———

> 假名遣ひを論じたり，その論爭に口を出したりするのは私のがらでないと思ふから差し控へてゐるけれど，自分の事としては決して今の新假名遣ひに服するわけには行かない。國語と云ふものに何の愛情もない一味の國語學者が，國語の上に殘酷な處置を施して我が事成れりと云つた顔をしてゐる。學者は科學者であり，メスを執つて手術を行ふ場合，國語が痛いと泣いても，滾滾と血が吹き出しても平氣なのだらう。[27)]

先生の怒りはとどまるところを知らない。その矛先は，文部省の方針に無批判に追従する新聞をはじめとするジャーナリズムにも向けられる——

> 新聞等で假名遣ひの扱ひが窮屈になつたので大變困る。そつちできめた方針に從ひ，人の書いた物を勝手に直さうとする。横暴とも彈壓とも言ひ樣のない處置で，その新聞が掲げてゐる言論の自由だとか民主主義だとか云ふものの後味の苦さを十分に味ははされる。[28)]

> 私には私の文法がある。人から押しつけられた無理強ひに從つて自分の文法を變へたり捨てたりする事は出來ない。今年になつて，別別の二軒の本屋から，中學生に讀ませる爲の文學全集を編纂するに就き，その中に私の作品も入れたいから許可を求めると云つて來た。今の中學生はまだ文法假名遣ひを教はつてゐない。だから收錄する作品全部を新假名遣ひに書き直すと云ふのである。私は兩方ともことわつた。中學生が私などの物が讀める樣になつてから，その勉強をした上で讀んでくれればいいので，こちらからの作品の文法を改めてまで彼等に讀んで貰ふ必要は少しもない。[29)]

いわゆる国語改革のでたらめさ加減については，二, 三例を挙げるだけで十分であろう。早い話が，国語の「国」である。正字「國」のくにがまえの中は「域」「閾」などと同じく「境」の意味を持つ。中を「王」につくる俗字はあったが，新字採用の際,「日本に王はもういない」という理由で「玉」に替えたというから馬鹿馬鹿しいにも程がある。ジジェクなら，国語審議会の連中はラカ

ンを読んでいたのだというだろう。おかげで「國」と「域」や「閾」との連関は断たれてしまったし，漢字を覚えるにしても二度手間で，これでは「教育の負擔を輕くする」どころか，「國民の生活能率を下げ，文化水準を低める」ことになりかねない。いや，事実そうなっている。

仮名遣いについても同じことがいえる。なぜ「ひざまづく」ではなくて「ひざまずく」なのか。「ひざまずく」は「膝」を「突く」のではないのか。なぜ「ぢめん」ではなくて「じめん」なのか。「じめん」は「地」の「面」ではないのか。どうして「手綱」が「たづな」で，「絆・生綱」は「きずな」なのか。「手綱」には「綱」の語感が生きていて，「絆」はそうでないというのか。それなら語感が生きているかいないかの判定は誰が下すのか。国語学者か，それとも文部省の役人か。

こういうでたらめな国語改革の結果，失われたのは言葉と言葉のあいだの有機的な連関であり，「匂い」であり，「移り」であり，コトノハの奏でる「聯想の豊かな諧音」なのだ――

> 電氣機關車は何の風情もないが，蒸氣機關車には表情がある。汽笛の響きも，電氣機關車は巨人が按摩笛を吹いてゐる樣な音をさせるが，蒸氣機關車は聯想の豊かな諧音を吹き鳴らす。[30)]

筝をよくした先生にとって，戦後の新字新仮名遣いは，まるで奇態な「巨人」の吹く「按摩笛」のように聞こえたのかも知れない。

昭和 46 年 4 月 20 日，先生の「阿房列車」が汽笛一声「冥途」へ向かって出発してから幾星霜，何としたことか，先生があれほど嫌った新字新仮名で書き直された百閒本が大量に出回りはじめた。先生の遺志は踏みにじられたのである。先生が死の間際まで「切れ切れに，別別に，思ひ出しては書き留めた」数々の思い出は，文明開化の波に洗われたあの後楽園さながら，「むげむげとむき出し」に，「へんに明かるく白け返つた」ものになり，ここに先生の「記憶に殘る古里」はまったく滅び去ったのである。それは「記念帖」すら後に残さぬ最後の「一刷毛」，記憶の抹殺であった。

註

1）『東京焼盡』，『全集』第 5 巻，379 頁。百閒の引用はすべて『内田百閒全集』（講談社，昭和 46–48 年）による。
2）同上，253 頁。
3）「魔の退屈」『定本坂口安吾全集』第 3 巻，冬樹社，昭和 43 年，84 頁。
4）『全集』第 5 巻，309 頁。
5）『全集』第 5 巻，415 頁。
6）「作文管見」『沖の稲妻』，『全集』第 4 巻，409 頁。
7）『リアリズムの源流』，河出書房新社，平成元年，15 頁。
8）同上，17 頁。
9）「俳諧派文学研究」については，酒井英行「六高時代の内田百閒――『校友会会誌』の検討」（『内田百閒―夢と笑い』，有精堂，昭和 61 年，87–99 頁）を参照。
10）Jacques LACAN, « Fonction et champ de la parole et du langage », in *Écrits,* Paris : Éd. du Seuil, 1966, p. 247.
11）「亂れ輪舌 FOT」『麗らかや』，『全集』第 10 巻，44 頁。
12）『東京焼盡』，『全集』第 5 巻，410 頁。
13）同上，334 頁。
14）同上，311 頁。
15）同上，337 頁。
16）同上，339 頁。
17）『内田百閒論――無意味の涙』，福武書店，昭和 58 年，16 頁。
18）同上，14 頁。
19）『荷風全集』第 24 巻，岩波書店，昭和 39 年，21 頁。
20）『東京焼盡』，『全集』第 5 巻，387 頁。
21）『全集』第 5 巻，67 頁。
22）『全集』第 6 巻，311 頁。
23）『小林秀雄全集』第 7 巻，新潮社，昭和 43 年，167 頁。
24）『東京焼盡』，『全集』第 5 巻，345 頁。
25）『第三阿房列車』，『全集』第 7 巻，342 頁。
26）「古里を思ふ」『随筆億劫帳』，『全集』第 6 巻，115 頁。
27）「驛の歩廊の見える窓」『東海道刈谷驛』，『全集』第 8 巻，409 頁。
28）同上，408 頁。
29）同上，409 頁。
30）『第三阿房列車』，『全集』第 7 巻，295 頁。